

古典ヘブライ語の対話テキストにおける 自称詞ならびに対称詞の用法について

三 上 宗 一

0. はじめに

この小論では特定の古典ヘブライ語対話テキストを取り上げ、その中に出現する自称詞および対象詞の使用分布を調べるとともに、その用法を敬語使用としての側面から検討し直すことを目的とする¹⁾。

敬語は日本語に限らず世界中の多くの言語に存在する。しかし文献に残されたヘブライ語（古典ヘブライ語）を見る限り敬語そのものの体系は決して豊かとは言えず、特に日本語の尊敬の助動詞のように専ら敬意を表すための文法形式などはほとんど存在しないと言わざるを得ない²⁾。

そのかわり、いわゆる「自称詞」および「対称詞」をそれぞれ敬意表出の手段として使い分けているように思われる例が、特に2人以上の登場人物の発話からなる対話テキストにおいて比較的頻繁に見い出される。これは自分のことをどう呼ぶか（自称詞）および相手のことをどう呼ぶか（対称詞）に関するものであり、文の構成成分の一部として現れることもあれば呼格的表現として現れることもある³⁾。とりわけ身分の異なる人間同士の対話において顕著に観察される。

以下ではまず自称詞および対称詞における一般的な問題点について概観した上で、特定の対話テキストにおける出現箇所を列挙し、その分布について検討していきたい。ただその際、少なくとも(1)取り上げた物語テキストが実際の発話そのものを忠実に再現したものである保証は全くないこと、さらに(2)特定の背景を持つ読者を対象として編纂されたものであるため、すでに筆者もしくは編纂者によるバイアスが掛けられている可能性もあること、の2点はいわば資料上の限界として銘記しておく必要がある⁴⁾。

1. 自称詞と対称詞

1. 1. 自称詞

鈴木(1973)によれば、自称詞(terms of self)とは「話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念である。従って、(中略)いわゆる一人称代名詞は当然のことながら自称詞の極く一部となるにすぎない。」(p.146)日本語では人称代名詞と並んで名前や

親族名称、地位名称などを使って自分を指すことができるが、このうち例えば親族名称や地位名称は、目下の者を相手として自分のことを言う場合に限られ目上の者を相手とする時には使いにくいなど、その使用には身分の相対的上下関係がかなり強力な条件として働いている。(上掲書p.148-158)

1. 2. 対称詞

これも同じく鈴木(1973)によれば、対称詞(address terms)とは話の相手に言及することばの総称であるが、それには以下のように2つの異なった用法が含まれているという。

「第一は呼格的用法(vocative use)と呼ばれるもので、相手の注意を引きたいときや、相手に感情的に訴えたい場合などに用いられる。この呼びかけ語は、インド・ヨーロッパ語などでは、古くは名詞の格変化の中で呼格という独立した取扱いを受けていた。(後略)」(p.146)

「対称詞の第二のタイプは、欧米の一部の人類学者によって代名詞的用法(pronominal use)と呼ばれているもので、ある文の主語または目的語として用いられたことばが、内容的には相手を指している場合を言う。インド・ヨーロッパ語では、相手に言及する内容を持つ文の主語または目的語には、通例二人称代名詞がくることから、このように名付けたものである。例えば、子供が母親に腹を立てたとき、英語なら"I hate you!"と言うのを、日本語では、「お母さんなんてきらい」と言う。このyouや「お母さん」が、ここにいう代名詞的用法の対称詞である。(後略)」(p.146-147)

日本語では、特に公の場で目上の者に人称代名詞や名前を使って呼び掛けてはならない、逆に目下の者には親族名称、地位名称が使いづらい、などの制限がある。

以下で実例を検討する。なお、今回取り上げるのは1人称及び2人称の独立代名詞と、一般名詞表現の2つである。独立人稱代名詞は主に主語として、あるいは話題化された要素として用いられ、動詞や前置詞の目的語としては用いられない。(そのためには接尾人稱代名詞が用いられるが、今回は取り上げない。)

2. 出現例・創世記37章、39章～50章(ヨセフ物語)

このテキストは家庭内での会話と並んで、formalな場における異なる身分の人物同士の会話が頻出する点が特徴的である。

内容：【37章】ヨセフは父ヤコブの寵愛を受けたため他の兄弟たちから憎まれ、ドタ

ンの野で捕われてイシュマエル人に売られる。ヤコブにはヨセフが死んだと嘘の報告がなされ、ヤコブは悲嘆する。【39章】エジプトに連れて来られたヨセフはエジプト人ポティファルの許で出世する。しかしその妻の恨みを買ひ、偽りの訴えによって投獄される。【40章】ヨセフは牢屋の中で他の囚人の夢を解き明かす。【41章】ある夜ファラオが夢を見、それをヨセフが解き明かす。ヨセフはファラオによってエジプト第二の地位へと引き上げられる。【42章】ヤコブは食糧を調達するために息子たちをエジプトに送る。兄弟たちはそこで高官となったヨセフに謁見するがそれと気が付かない。ヨセフはわざと兄弟たちにスパイの疑いをかけ、末の弟ベニヤミンを連れて来させるため一旦帰郷させる。【43章】兄弟たちは父ヤコブを説得し、ベニヤミンを連れて再度エジプトへ赴く。そこでヨセフに歓待される。【44章】ヨセフは再度兄弟たちに嫌疑をかける。ベニヤミンのみを残して去らせようとするヨセフをユダが説得する。【45章】ヨセフはついに兄弟たちに正体を明かし、ヤコブにもヨセフが活着している旨伝えられる。【46章】ヤコブはエジプトに来て【47章】ファラオに謁見する。ヨセフはエジプト人の土地をファラオのために買い上げる。【48章】ヤコブの死期が近付く。ヤコブはヨセフの2人の息子を祝福する。【49章】ヤコブは12人の息子たちを祝福し、息を引き取る。【50章】ヨセフはヤコブを埋葬するが、兄弟たちはヨセフの復讐を恐れる。ヨセフは兄弟たちを安心させる。長い年月が過ぎ、やがてヨセフも息を引き取る。

2. 1. 自称詞の出現例

・ 1人称単数人称代名詞 אֲנִי 'ānî, אֲנֹכִי 'ānōkî [27]

【ヤコブ(父)→ヨセフ(息子)】⁹⁾ 37:10, 48:7, 21, 22

【ヨセフ→シェケムの人】 37:16

【ルベン(長男)→兄弟たち】 37:30, 30

【料理長→ヨセフ】 40:16

【献酌人の長→ファラオ】 41:9, 11

【ファラオ→ヨセフ】 41:15, 44

【高官(ヨセフ)→兄弟たち】 42:18

【ルベン(長男)→ヤコブ(父)】 42:37

【ユダ(息子)→ヤコブ(父)】 43:9

【ヤコブ(父)→息子たち】 43:14, 49:29

【ヨセフ→兄弟たち】 45:3, 4, 50:19, 21, 24

【神→ヤコブ】 46:3, 4, 4

【ヨセフ(息子)→ヤコブ(父)】 47:30

【ヨセフ→ファラオの家の執事【執事→ファラオ【ヤコブ(父)→ヨセフ(息子)】】】

・ 1 人称複数人称代名詞 אֲנַחְנֹּו 'ānahñû, נַחְנֹּו nahnû 42:11. [15]

【ヨセフ→兄弟たち】 37:7

【兄弟たち→高官（ヨセフ）】 42:11, 11, 13

【兄弟たち→兄弟たち】 42:21, 43:18

【兄弟たち（息子）→ヤコブ（父）【兄弟たち→高官（ヨセフ）】】 42:31, 31

【ユダ（息子）→ヤコブ（父）】 43:8

【兄弟たち→ヨセフの家の執事】 44:9

【ユダ→高官（ヨセフ）】 44:16

【ヨセフ→兄弟たち【兄弟たち→ファラオ】】 46:34

【兄弟たち→ファラオ】 47:3

【エジプト人たち→ヨセフ】 47:19, 19

・ 一般名詞単数形 + 2 人称男性単数所有接辞 אֲבֹדְכָא 'abdəkā, אֲבֹדְכָא 'abdekā 「あなたの僕」 [4]

【ユダ→高官（ヨセフ）】 44:18, 18, 32, 33

・ 一般名詞複数形 + 2 人称男性単数所有接辞 אֲבֹדְכֵם 'ābadəkā 「あなたの僕たち」 [13]

【兄弟たち→高官（ヨセフ）】 42:10, 11, 13

【兄弟たち→ヨセフの家の執事】 44:7, 9

【ユダ→高官（ヨセフ）】 44:16, 21, 23, 31

【ヨセフ→兄弟たち【兄弟たち→ファラオ】】 46:34

【兄弟たち→ファラオ】 47:3, 4, 4

・ 一般名詞複数形 + 3 人称男性単数所有接辞 אֲבֹדָו 'ābadāw 「彼の僕たち」 [1]

【ユダ→高官（ヨセフ）】 44:19

・ 一般名詞単数形 + 1 人称複数所有接辞 כֻּלָּנוּ kullānū 「我々全て」 [1]

【兄弟たち→高官（ヨセフ）】 42:11

・ [固有名詞] + [一般名詞単数形 + 2 人称男性複数所有接辞] יִשְׂרָאֵל אֲבִיכֶם yiśrā'el 'ābīkem 「お前たちの父イスラエル」 [1]

【ヤコブ（父）→息子たち】 49:2

2. 2. 対称詞の出現例

・ 2 人称女性単数人称代名詞 אַתְּ 'at [1]

【ヨセフ→ポティファル(主人)の妻】 39:9

・2人称男性単数人称代名詞 אַתָּה 'attāh [7]

【ファラオ→ヨセフ】 41:40, 45:19

【ユダ(息子)→ヤコブ(父)】 43:8

【ヨセフ→兄弟たち【ヨセフ(息子)→ヤコブ(父)】】 45:10, 11

【ヤコブ(父)→ルベン(長男)】 49:3

【ヤコブ(父)→ユダ(息子)】 49:8

・2人称男性複数人称代名詞 אַתֶּם 'attem [14]

【高官(ヨセフ)→兄弟たち】 42:9, 14, 16, 16, 19, 19, 44:17

【兄弟たち→ヤコブ【高官(ヨセフ)→兄弟たち】】 42:33, 34, 34

【ヨセフの家の執事→兄弟たち】 44:10

【ユダ→高官(ヨセフ)【ヤコブ(父)→兄弟たち】】 44:27

【ヨセフ→兄弟たち】 45:8, 50:20

・一般名詞単数形(地位名称) פַּרְוֵה par'ōh 「ファラオ」 [10]

【献酌人の長→ファラオ】 41:10,

【ヨセフ→ファラオ】 41:16, 25, 25, 28, 28, 32, 33, 34, 35

・一般名詞単数形+1人称単数所有接辞 אֲדֹנָי 'ādōnî 「我が主」 [16]

【兄弟たち→高官(ヨセフ)】 42:10(voc.)

【兄弟たち→ヨセフの家の執事】 43:20(voc.), 44:6

【ユダ→高官(ヨセフ)】 44:16, 16, 18(voc.), 18, 19, 20, 22, 24, 33

【エジプト人→ヨセフ】 47:18, 18, 18, 25

・一般名詞単数形+1人称単数所有接辞 בְּנִי bənî 「我が子」 [2]

【高官(ヨセフ)→ベニヤミン(弟)】 43:29(voc.)

【ヤコブ(父)→ヨセフ(息子)】 48:19(voc.)

・一般名詞単数形+1人称単数所有接辞 אָבִי 'ābî 「我が父」 [2]

【ユダ→高官(ヨセフ)【ユダ(息子)→ヤコブ(父)】】 44:32

【ヨセフ(息子)→ヤコブ(父)】 48:18(voc.)

・一般名詞複数拘束形+固有名詞 בְּנֵי יַעֲקֹב bənê ya'āqōb 「ヤコブの息子たち」 [1]

【ヤコブ（父）→息子たち】 49:2(voc.)

・固有名詞 **יַעֲקֹב** ya'äqōb 「ヤコブ」 [2]

【神→ヤコブ】 46:2(voc.), 2(voc.)

・固有名詞 **יְהוָה** yəhwāh 「ヤハウェ」 [1]

【ヤコブ→神】 49:18(voc.)

3. 出現例・出エジプト記1章～12章（エジプト脱出まで）

このテキストではしばしば直接話法が多重に引用されており、話者を特定しづらい発話も一部存在する⁹⁾。

内容：【1章】ヨセフのことを知らない新しい王が即位し、増加したイスラエル人を虐げる。男の新生児を殺す命令が下される。【2章】モーセ誕生。姉の機転により命拾いする。成長後、殺人の罪で追われ、ミディアンの地に逃れる。【3章】モーセはヤハウェにより招命され、【4章】しるしとなる奇跡を伝授される。エジプトに帰還。【5、6章】ファラオとの最初の交渉。しかし結局は不成功に終わる。【7章】杖を蛇に変える。ナイル河が血で満ちる。【8章】蛙、ぶよ、あぶの災い。【9章】疫病、皮膚病、雹の災い。【10章】いなご、闇の災い。【11、12章】過越の祭の制定。初子の死の災い。イスラエル人はエジプトを出る。

3. 1. 自称詞の出現例

・1人称単数人称代名詞 **אֲנִי** 'ānî, **אֲנֹכִי** 'ānōkî [35]

【ファラオの娘→モーセの実母】 2:9

【神→モーセ】 3:6, 12, 19, 4:11, 12, 15, 21, 6:2, 5, 29, 29, 7:3, 5, 10:1, 2

【モーセ→神】 3:11, 13, 4:10, 10, 6:12

【神→モーセ【モーセ→ファラオ【神→ファラオ】】】 4:23, 7:17, 27, 8:18, 9:14

【神→モーセ【モーセ→ファラオ】】 7:17

【ファラオ→モーセ】 8:24, 9:27,

【モーセ→ファラオ】 8:25

【モーセ→ファラオ【神→ファラオ】】 11:4

【神→モーセ【神→イスラエル人】】 6:6, 7, 8, 12:12

・1人称複数人称代名詞 **אֲנַחְנִי** 'ānahñû [1]

【モーセ→ファラオ】 10:26

・一般名詞単数形＋2人称男性単数所有接辞 אֲבֹדְכָּ 'abdekā 「あなたの僕」〔1〕

【モーセ→神】4:10

・一般名詞複数形＋2人称男性単数所有接辞 אֲבֹדְכֶּם 'abadēkā 「あなたの僕たち」〔3〕

【イスラエル人の下級役人→ファラオ】5:15, 16, 16

・一般名詞＋1人称複数所有接辞 כֻּלָּנוּ kullānū 「我々全て」〔1〕

【エジプト人→イスラエル人?】12:33

・固有名詞 יְהוָה yəhwhā 「ヤハウェ」〔2〕

【神→モーセ【神→イスラエル人の会衆】】12:11, 14

3. 2. 対称詞の出現例

・2人称男性単数人称代名詞 אַתָּה 'attāh 〔12〕

【一人のエジプト人→モーセ】2:14

【神→モーセ】3:5, 18, 4:16, 7:2

【ツィッボラ（妻）→モーセ（夫）】4:25

【神→モーセ【モーセ→ファラオ【神→ファラオ】】】7:27, 9:2

【モーセ→ファラオ】9:30, 10:25

【モーセ＋アロン→ファラオ【神→ファラオ】】10:4

【モーセ→ファラオ【ファラオの僕たち→モーセ】】11:8

・2人称男性複数人称代名詞 אַתֶּם 'attem 〔7〕

【民の監督及び下級役人→民【ファラオ→民】】5:11

【ファラオ→下級役人】5:17, 17

【ファラオ→モーセ＋アロン】10:11, 12:31

【神→モーセ【神→イスラエル人の会衆】】12:13

【モーセ→イスラエルの全長老たち】12:22

・一般名詞複数形＋1人称単数所有接辞 אֲדֹנָי 'ādōnāy 「我が主」〔3〕

【モーセ→神】4:10(voc.), 13(voc.), 5:22(voc.)

・一般名詞単数形（地位名称） פַּרֹּחַ par'ōh 「ファラオ」〔2〕

【モーセ→ファラオ】8:25, 25

・固有名詞 מֹשֶׁה mōšeh 「モーセ」〔2〕

【神→モーセ】3:4(voc.), 4(voc.)

4. まとめ

いくつか指摘できる点を挙げておく。

a. 1人称の代名詞は目上の者が目下の者に向かって自分を指す場合にも、その逆の場合にも同様に使われ得る。動詞文、非動詞文いずれにも用いられるが、非動詞文では主語は必須項目であり、必ずしもプラグマティックな要因が絡んでいるとは見なし難い例も存在する。一方動詞文では主語、主題は必須項目でないため、あえてそれらが出現する事例では何らかの文法外のプラグマティックな要因がからんでいると見られるが、主に主題の転換、他の要素と並べて列挙する場合などに用いられていることが多いようである。

b. 一般名詞を自称詞として用いる場合、自分を相手の「奴隷」としてへりくだって述べる謙讓語的用法がほとんどである。使用される場面もファラオの宮殿など公の場が多く、目上の者に対してあえて謝罪、懇願などをする場面で頻出している。なお、創世記（ヨセフ物語）では自らを相手の「奴隷」として表現する例が18例出てくるのに対し、出エジプト記（エジプト脱出まで）では4例しか出現していないが、その4例は全て目上の立場の者への懇願の場面で用いられている。（モーセはファラオに対しては一度も自称詞として「奴隷」の語を用いていない。）またこの用法は家庭内でも一般的ではない⁷⁾。

c. 2人称の代名詞は公の場、家庭内ともに用いられ得る。複数形では目上の者が目下の者を指す際に使われている事例が多いが、単数形では身分との関係ははっきりしない。なお、2人称代名詞は家庭内では目下から目上への使用も多く認められる。

d. 一般名詞を対称詞として用いる場合、相手を自分より高める尊敬語的用法が主なもので、主に支配関係を表す地位名称（主人、ファラオ）が用いられる。自称詞の場合同様公の場で多く用いられている。一方家庭内で親族名称が用いられている事例もあるが、ほとんどは呼格的用法である。

e. 創世記と出エジプト記の調査対象テキストを比較した場合、地位名称（奴隷、主人、ファラオなど）を自称詞および対称詞として用いた事例は創世記に多く見られる。特に41章25～36節や44章18～34節のように身分の低い者が身分の高い者を相手に口上を述べたり身を呈して訴えかける緊迫した場面などでは頻出する。他方出エジプト記においては一般的でない。これは出エジプト記ではモーセ（及びアロン）はファラオと対等な立場で対決する姿勢を取っている上、神からの言葉を代弁するという役目も担っている

ため、非対等な立場を暗示する地位名称の使用をあえて意図的に避けているのかもしれない。ちなみに両テキストでファラオに対してどのような対称詞が用いられているかを見てみると以下ようになる。

	創世記	出エジプト記
פַּרְוֹה par'oh 「ファラオ」	10	2
אַתָּה 'attah 「あなた、お前」	0	5

創世記でのファラオは威厳こそあれ対立すべき存在としては描かれていないのに対し、出エジプト記のファラオは基本的に頑迷、偏狭であり、イスラエル人と対立する存在として描かれている。出エジプト記で地位名称としての「ファラオ」が用いられている2つの箇所は、ともにファラオがモーセの願いを一旦受け入れ、対立関係が表面上は解消した直後にモーセの発話の中で出現している。このことは、純粋に対話の当事者間の絶対的な身分差のみによって自動的に自称詞ならびに対称詞の使用が決定づけられているわけではない、という可能性を示唆しているように思われる。もしかしたら対等の立場での対立関係の有無といった、身分差とは別の条件が働いている可能性もあるかもしれない。

今回は身分の上下関係を主要なパラメーターとして自称詞・対称詞の分布を検討してみたが、ここでいう身分の上下関係は、Brown&Gilman(1960)の言うpower(力)の原理に基づくものとして見るができる。一方調査範囲の対話文を検討する限り、これ以外にも例えば親疎や内と外、対立関係の有無、心理的距離などのような、Brown&Gilmanのいうsolidarity(連帯)の原理も関係している可能性もあることが明らかとなった。ここで得られた結論は決して古典ヘブライ語全体の特徴として一般化できるものではないが、他の対話文テキストでも同様の調査を行えば、古典ヘブライ語の自称詞・対称詞の用法に対してそれらのパラメーターが持つ相関性の程度についてより詳細な点を明らかにできるかもしれない。少なくとも古典ヘブライ語の「敬語」について扱う場合、身分差という上下関係だけでなく連帯という横の関係にも配慮すべきであることは間違いないと思われる。

注

- 1: 南(1987)は、敬語使用の条件として内的条件(言語体系内の制約)と外的条件(言語外の要因)とを区別し、後者をさらに①人間関係の条件、②ことがらに関する条件(話の内容に関するもの)、③状況に関する条件(あらたまった状況か否か、一対一か一対多か、直接の話か間接の話か、等)に分けている。今回特に注目した①については、(a)本人か本人でないか、(b)性別、(c)所属階層、地位、立場等、(d)上下関係(身分的、生得的、経歴的、役割的、差別的、能力的、立場的、絶対的)、(e)親疎関係(心理的、社会的)などのように細分化されている。
- 2: 'ēlohîm 「神」、'ādōnāy 「我が主」などのように尊敬を表す複数形は存在するが、ご

く一部の語にしか見られない。

3 : 以下の例を参照のこと。 :

1) bî 'ăḏōmî yəḏabber nā' 'ăḏəkā dāḅār bə'oznê 'ăḏōmî
我が主よ(voc.) 語る(3.m.sg.) あなたの僕が(subj.) 一言 耳に 我が主の
「どうか我が主よ、我が主の耳に僕が一言入れることをお許し下さい。」 (Gen. 44:18)
文中に2度出てくる'ăḏōmî (我が主) はいずれも対称詞であり、最初が呼格的用法、
2つ目が属格的関係によって直前の名詞にかかっている。'ăḏəkā (あなたの僕) は自称
詞であるが、動詞は1人称でなく3人称になっている。(以下の本文参照。)

4 : 取り上げたテキスト(創世記ヨセフ物語および出エジプト記エジプト脱出まで)の成
立過程はかなり複雑であり、成立年代も不祥である。このうちヨセフ物語は、たとえ異
なる資料の複合体であるにせよ内容的な統一性は比較的高いのであるが、出エジプトの
方はかなり渾沌としている。今回設定した調査範囲もあくまで便宜的なものにすぎない
ことをあらかじめお断りしておきたい。

5 : 【話者→聞き手】を表す。下線部は当該の自称詞もしくは対称詞が指示している人間
を示す。かっこが重複しているのはせりふの引用を表す。

6 : 出エジプト記9章1~5節に3度出てくる固有名詞 יהוה, yəhwāh 「ヤハウエ」は、自
称詞であるのかそうでないのかあいまいである。資料には含めずにおいた。

7 : ただし調査対象テキストではないが、以下のような例も存在する。

2) yaqum 'āḅî wəyō'kal miššēḏ bənô ba'ăḅūr təḅārākannî napšekā
起きる 我が父 食べる 獲物を 彼の息子の 為に 私を祝福する あなたの魂が
「我が父が起き、息子の獲物から幾らか食べますように。あなたの魂が私を祝福するた
めです。」 (Gen. 27:31)

2番目の単語'āḅî「我が父」が対称詞である。前後の2つの動詞は3人称男性単数形と
なっており、bənô「息子」にも3人称の所有接辞が付いている。一方3番目の動詞の主
語napšekāは「彼の魂」でなく「あなたの魂」となっており、所有接辞が2人称となっ
ていることに注意。これはイサクの長子エサウが、イサクの祝福を得ようとして狩りの獲
物からごちそうを作り、父イサクに食べさせようとしている場面での発話である。祝福
してもらうために、親子間とはいえかなり尊敬度の高い敬語表現が使用されている。

参考文献

鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』 岩波新書(青版)858 岩波書店

南不二男(1987)『敬語』 岩波新書(黄版)365 岩波書店

Biblia Hebraica Stuttgartensia. (1967/77, 1984) Deutsche Bibelgesellschaft.

Brown, R. W. & A. Gilman(1960) 'The Pronoun of Power and Solidarity' in *Style in Language*, T. A. Sebeok ed., M. I. T. Press.